

青
空
文
庫

複製され、広く活用されることは、
私たちの心からの願いです。

青空文庫 ● 編著

も う 一 つ の 読 む 自 由

青空文庫 ● 発行

全

青空文庫一〇年の成果をすべての図書館に
『青空文庫全』寄贈計画が目指すもの 001

収録 六六一二作品を活用しよう
『青空文庫全』DVD-ROMの使い方 004

インターネット図書館はこう生まれこう育った
青空文庫一〇年記 012

文化共有の青空に黒雲をかける
著作権保護期間延長に反対 030

●写真クレジット●

「作家と作品リスト」中の写真、イラストはすべて、著作権の保護期間を過ぎていて確認できたものを、ウイキメディア・コモンズ (<http://commons.wikimedia.org/wiki/Main:Commons>) からとりました。

ウイキメディア・コモンズで著作者が確認できたものは、以下の通りです。

- 太宰治・田村茂／ディケンズチャールズ (クリスマス・カロール) 初版本の挿絵：John Leach／夏目漱石・小川一真／ポー・エドガー・アラン：Oscar Halling／
- ホーソン ナサニエル：Matthew Brady／
- ユゴー ヴィクトル (「レ・ミゼラブル」) コゼットのイラスト：Emile Bayard

青空文庫一〇年の成果をすべての図書館に

門田裕志

『青空文庫全』寄贈計画が目指すもの

インターネットの電子図書館、青空文庫は、二〇〇七年、設立一〇周年を迎えた。

これを記念して、青空文庫全体をDVD-ROMにおさめ、『青空文庫全』と名付けた冊子に添えて、すべての公共図書館と大学、短大、高专、高校の図書館に寄贈する企画が提案された。立案者は、その狙いをこう語る。

国語の教科書には、かならず「文学史」のページがある。そこには、時代ごとに、作者名と作品名がたくさん並んでいると思う。しかし、教科書の「文学史」は、作家とその代表作を知るための手がかりにはなっても、作家の全貌、そして最も重要などんな作品なのか、を知るためにはあまり役に立たない。具体的に言えば、「文学史」を学んでも、そこに現れる実際の作品を読む人は少ない、ということだ。では、こういった作品は手に入りにくいのか、ということと、そうでない作品もあり、そうなってしまった作品もある。また、ある作家の全貌を知るには、一、二の作品では少な過ぎるということも確かなことだろう。学校の図書館、地域の公共図書館の多くは、「文学史」に登場する作品群を収録している。しかし、閉架にあつてアクセスがあまりよくなかったり、文字が小さく、本が古いことも多いことだろう。あまりに古い本は貸し出し禁止になっているかもしれない。青空文庫という試みは、こういったアクセスしにくい本へのアクセスをよくすることができる。

2007年10月27日初版第1刷発行

編著者 青空文庫

青空文庫全

自由を読む一つの空

発行所 青空文庫
〒160-0008 東京都新宿区三栄町8番37号
<http://www.aozora.gr.jp/>

ブックデザイン 原島康晴 (エディマン=edición iman)

印刷・製本 株式会社 ケー・アンド・エー

協力 株式会社 ライブラリー・アド・サービス

『青空文庫全』DVD-ROM 作家と作品リスト

この冊子のDVD-ROMには、二〇〇七年一〇月一日時点の青空文庫で公開されていた、著作権の保護期間(作者の死後五〇年まで)を過ぎた以下の作家の作品 計六八二点が収められています。

あなたはこれらの作品を、パソコンの画面やプリントアウトで読むことができます。パソコンの読み上げ機能を使って、聞くこともできます。パソコンのハードディスクに書き込んで保存したり、DVD-ROMのコピーをとって、家族や知人に配ることも可能です。

『青空文庫全』は、DVD-ROM付きで借り出せます。

パソコンを使っている方は、これで青空文庫を体験してください。イメージがつかめたら、インターネットの青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) にアクセスしてください。登録作品は、毎日増えています。

パソコンを使っていない方——この冊子は、あなたに青空文庫を知ってもらいたくて作りました。

お宅には、使わずに眠っているパソコンがありませんか? 図書館や学校、お友達の家パソコンを使わせてもらえないでしょうか? 最初は、慣れた人へ手伝ってもらおうと良いでしょう。パソコンをみつけ、電源を入れて、このDVD-ROMを差し込んでみてください。

図書館で読める膨大な数に比べれば、青空文庫の作品はわずかです。ただここでも、作品は、あなたに読まれる機会を待っているのです。

青空文庫とはどんなものか。一言で言えば、著作権が失効した作品をインターネット上で共有する試みである。著作権は、大きく著作者人格権と著作財産権に分けられる。人格権とは、作品をそのまま伝えるよう求める権利。財産権は、作品で儲ける権利である。人格権は永遠に続くが、財産権は著者の死後五〇年で失効する。失効した作品は、改変しない限り、自由に、全ての人が共有できる。インターネット登場以前、このような共有は難しかった。紙を用いている限り、出版に要するコストがどうしても付きまとうからだ。青空文庫は、インターネットを利用して、財産権の失効した作品を共有する試みだ。その成果は、インターネットへの接続環境があれば、世界中のどこでも、そして誰でも利用できる。

この冊子は、青空文庫という試みを知って欲しくて作成された。そして、全国の図書館に、これまでの成果を納めたDVD・ROM付きで寄贈されている。私が寄贈を思い立ったのは、簡単に言えば、日本語を使って生み出されてきた文化の蓄積をより多くの人と共有したいと思っただからだ。現在、私はアメリカに定住しており、地域の図書館には日本語の本はない。日本の中でも、地域によって利用できる図書の種類、数には、かなり違いがあるだろう。青空文庫はそのような違いを補正する可能性を秘めている。ただ、インターネットへの接続環境もまた、現在では、全ての人が利用できる訳ではない。だからこそ、青空文庫のこれまでの成果を収めたDVD・ROMを全ての図書館に寄贈したい、と考えたのだ。

全国の図書館は、その「図書館の自由に関する宣言」の中で、「知る自由」の保証を謳っている。そして、現在まで、その宣言に則り、より多くの人々がより多くの知識に触れる可能性を拡げるために、蔵書の蒐集を行なっている。これまでも、そしてこれからも、図書館の提供する「知る自由」は、貴重であることだろう。もちろん、私を含めて、青空文庫を支えている方々も、図書館を利用して、その活動を行なっている。図書館には、ただただ感謝するばかりだ。ただ、惜しむらくは、図書館の中心的な活動は紙の媒体になってしまうことだ。紙媒体は、その利点とともに、どうしても、欠点を持たざるを得ない。「本」という形は、ハンディで便利である。何を隠そう私も「本」という形が大好きである。しかし、その利用は目で読むことに限られてしまう。視覚障害者には、普通の「本」は、利用できない。

青空文庫の電子ファイルは、目で本を読むこと以外にも、「読む」可能性を提供できる。読み上げソフトを利用して、耳で「読む」ことも容易だ。青空文庫の拡げることのできる可能性は、図書館の提供してくれる「知る自由」と少し異なる方向で「知る自由」に貢献できると考えている。それは「読む自由」という言葉で表すことができるだろう。「本」を目で読む以外の方法で「読む」ことが可能であり、その選択の幅を拡げることができる「自由」である。「読む自由」をできるだけ多くの人に知ってもらいたい、これが『青空文庫全』を寄贈した理由と言える。

再び、「文学史」に、個人的な述懐に、戻りたい。もし、私が中学生や高校生の頃に、国語の教科書で「文学史」を眺めている時に、実際の作品に容易に触れることができたなら、と考えることがある。著者名と作品名の羅列が「文学史」ではないと思う。その中身に触れることができこそ、文化の蓄積を真に受け取り、そして未来への可能性を開いていけるのではないか、と思う。青空文庫の収録作は、明治時代以降に偏っているが、それでも歴史の中で蓄積された日本文化の積み重ねは膨大なものである。ここでは、「文学史」を例に挙げたが、現在収録されている六千以上の作品の切り口は、まだまだある。できるなら、これを手にした方が、実際の作品に触れて、多くの切り口を見つけて欲しい。そのためには、まずこのDVD・ROMをコンピュータに入れて、開いてみて欲しい。そこには、自由な形で「読む」ことのできる宝の山があるはずだから。

あ 愛知敬一
「アラビヤの伝」
会津 八一
「月の石等四篇」
饗庭 篁村
「良夜」
秋田 滋
モリハッサンある自殺者の手記 訳、等五篇
芥川 竜之介
「奉教人の死」 「藪の中」 「歯車」 等三三三篇
阿部 徳蔵
「美術曲芸しん粉細工」
アミーチス エドモンド・デ
有島 武郎
「母を尋ねて三千里」
「或る女」 「生まれいずる悩み」
「小さき者」 等三三三篇
淡島 寒月
「死」 等一篇
アルチバジラフ ミハイルペトロヴィチ
「死」 等一篇
アンドレーエフ レオニード
「大」
イエイツ ウィリアム・バトラー



左から菊池寛、芥川竜之介

生田 春月
「聖書」
池田 菊苗
「味の素」発明の動機
池谷 信三郎
「橋」
池宮城 積室
「奥間巡查」
石井 研堂
「東京市騷擾中の釣」等四篇
石川 三四郎
「社会的分業論」等九篇
石川 啄木
「二握の砂」 「悲しき玩具」 「雲は天才である」 等四篇
石河 幹明
「瘠我慢の説」 序 等二篇
石田 孫太郎
「猫と色の嗜好」
石橋 忍月
「罪過論」 等二篇
石原 莞爾
「最終戦争論」 「戦争史大観」 等二篇
泉 鏡花
「外科室」 「高野聖」
「夜行巡查」 等二六篇
板倉 勝宣
「山と雪の日記」 等四篇



石川啄木



泉鏡花

『青空文庫全』DVD-ROMの使い方

収録六六二作品を活用しよう

『青空文庫全』のDVD-ROMには、二〇〇七年二月一日時点の青空文庫で公開されていた、著作権の切れた作品六六二点がおさめられている。ウェブソフトで、縦組み印刷。青空文庫対応表示ソフトで、ルビ付き、縦組み表示。自由にコピーして、さまざまな電子機器でも利用してみよう。

DVD-ROMのセッティング

Windowsの場合

①付属 DVD-ROM をコンピュータの DVD-ROM ディスクドライブにセットしてください。



もしこのような「自動再生」機能が起動したら、「キャンセル」ボタンをクリックしてください。そして「フォルダを開いてファイルを表示する」を選んで、③へ進んでください。

②「スタート」より「マイコンピュータ」を選び、DVD-ROM ディスクドライブにある「aozora」ディスクをダブルクリックしてください。



③開いたウィンドウの中から「はじめにお読み下さい(.html)」をダブルクリックしてください。この DVD-ROM の中に入っているコンテンツの説明が書いてあります。



MacOSの場合

①付属 DVD-ROM をコンピュータの DVD-ROM ディスクドライブにセットしてください。

②デスクトップに「aozora」ディスクのアイコンが現れるのでダブルクリックしてください。



③開いたウィンドウの中から「はじめにお読み下さい.html」をダブルクリックしてください。この DVD-ROM の中に入っているコンテンツの説明が書いてあります。



※この DVD-ROM の動作等についてのご質問は、info@aozora.gr.jp までお問い合わせください。

伊丹万作 「人間山中真雄」等二六編
市島春城 「読書八境」
伊藤左千夫 「奈々子」「野菊の墓」「水書雑録」等二篇
伊東静雄 「わがひとと与ふる哀歌」等二篇
伊藤野枝 「ある男の墮落」等八篇
井上紅梅 魯迅「阿〇正伝」訳、等二篇
遠星北斗 「北斗帖」
今井邦子 「水野仙子さんの思ひ出」
岩波茂雄 「読書子に寄す」
岩野泡鳴 「神秘的半獣主義」等五篇
巖谷小波 「こがね丸」等一篇
ウィードグスターフ 「厄」等一篇
上田敏 「海潮音」等三篇
上村松岡 「母への追慕」等一六篇

内田魯庵 「犬物語」等二篇
内村鑑三 「後世への最大遺物」
海野十三 「テンマルク国の話」等九篇
榎本武揚 「海野十三敗戦日記」「太平洋魔城」
江見水蔭 「超人間X号」等五三篇
大阪圭吉 「書簡」
大杉栄 「死剣と生縄」等七篇
大槻文彦 「テバートの絞刑吏」等九篇
大手拓次 「日本脱出記」等二篇
大町桂月 「ことばのうみのおくかき」
尾形亀之助 「藍色の墓」等三篇
岡本一平 「秋の筑波山」等二篇
岡本かの子 「色ガラスの街」等七篇
岡本かの子 「非凡人と凡人の遺書」
「金魚撞乱二鶴は病みき」「母子叙情」等七六篇

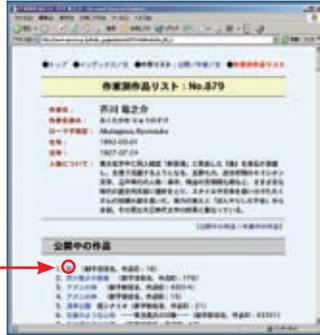
内村鑑三

⑤目的の作品を読む



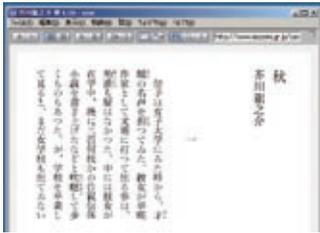
Web ブラウザーでその作品を読むことができます。

③作品を選ぶ



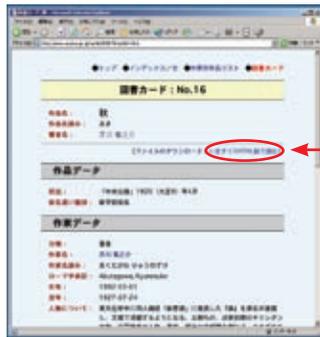
芥川竜之介の「作家別作品リスト」が表示されます。ここにはその作家の情報が記述されています。「公開中の作品」から目的の作品を選びます。ここでは「秋」を選んでみます。

⑥縦書きブラウザー「azur」で読む



青空文庫と株式会社バイジャーが共同開発した縦書きブラウザー「azur」を使えば、青空文庫の作品を縦書きで読むことができます。詳しくは以下のサイトをご覧ください。
<http://www.voyager.co.jp/azur/index.html>

④図書カードを開く



作品「秋」の図書カードが表示されます。ここには作品に関する情報が記述されています。すぐにその作品を Web ブラウザーに表示させたい場合は、「いますぐ XHTML (または HTML) 版を読む」をクリックします。

「やきもの読本」

小野 浩
「金のくひかきり」

折口 信夫
「国文学の発生」「死者の書」
「山越しの阿弥陀像の画因」等二〇〇篇

オルコット ルイーザ・メイ
「若草物語」
「書籍の風俗」

恩地 孝四郎
「若草物語」

葛西 善蔵
「哀しき父」「稚の若葉」等三篇

梶井 久
「臨終まで」

梶井 基次郎
「桜の樹の下には」「城のある町にて」「檸檬」等四篇

片岡 鉄兵
「今度こそ」

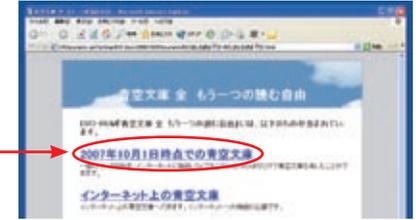
勝海舟
「旗本移転後の始末」等五篇

加藤 文太郎
「単行行」

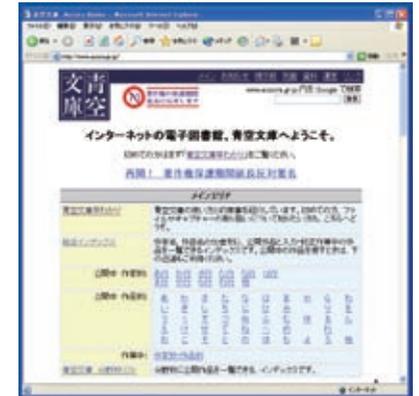
加藤 遼夫
「なまだけ」

オルコット

① 青空文庫トップページへ

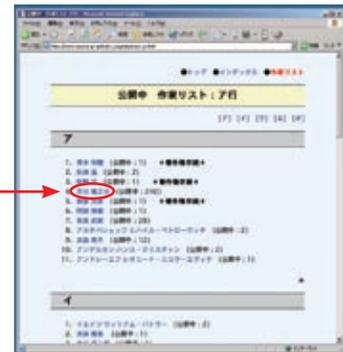


「はじめにお読み下さい.html」を開いて、その中の「2007年10月1日時点での青空文庫」をクリックします。



青空文庫のトップページが表示されます。

②作家リストから選ぶ
トップページのメインエリアにある「公開中 作家別」の中から「ア行」をクリックしてみます。



「公開中 作家リスト：ア行」のリストが表示されるので、そこから目的の作家をクリックします。ここでは「芥川竜之介」を選んでみます。

DVD-ROMにある青空文庫を開いてみる

岡本 綺堂
「半七捕物帳」「修禪寺物語」「ゆず湯」等七篇

小川 亮作
オマルルバイヤート」訳

沖野 岩三郎
「山さち川さち」等二篇

萩原 守衛
「彫刻家の見た美人」

小熊 秀雄
「流民詩集」等二六篇

小栗 風葉
「深川女房」

小栗 虫太郎
「黒死館殺人事件」等一七篇

尾崎 紅葉
「金色夜叉」等二篇

尾崎 放哉
「入庵雜記」等六篇

尾崎 秀実
「遺書」

小山内 薫
「梨の実」等二篇

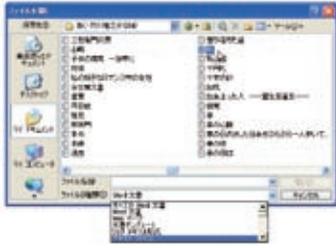
押川 春浪
「月世界競争探検」等三篇

織田 作之助
「晴雨」「夫婦善哉」「六白金星」等四〇篇

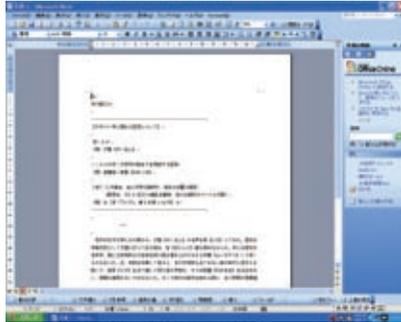
小野 賢一郎

尾崎紅葉

②ワープロソフト「Microsoft Word」などで印刷する



Microsoft Wordを起動後、メニューの「ファイル」から「ファイルを開く」を選び、「ファイルの種類」を「テキストファイル」にします。マイドキュメントなどに保存したテキストファイルが選択できるようになるので、それを選びます。



青空文庫のテキストファイルがWordで表示されます。



メニューの「ファイル」から「ページ設定」を選び、「文字数と行数」にある「文字方向」を「縦書き」にすれば、作品を縦書きで印刷することができます。

①自分のコンピュータにコピーする

MacOSの場合



DVD-ROMにある「作家別テキストファイル」フォルダを自分のコンピュータのフォルダなどにドラッグしてコピーします。

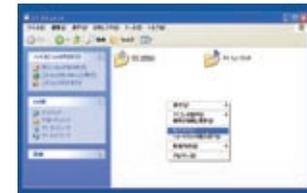


DVD-ROMから自分のコンピュータへ「作家別テキストファイル」がコピーされます。

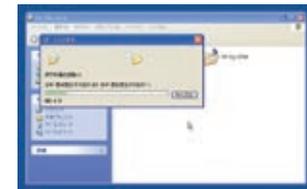
Windowsの場合



DVD-ROMにある「作家別テキストファイル」フォルダの上でマウスの右ボタンをクリックし、現れたポップアップメニューより「コピー」を選びます。



自分のコンピュータの「マイドキュメント」などを開いて、そのウィンドウの上でマウスの右ボタンをクリックし、現れたポップアップメニューより「貼り付け」を選びます。



DVD-ROMから自分のコンピュータへ「作家別テキストファイル」がコピーされます。

DVD-ROMにある「作家別テキストファイル」を利用する

【金子ふみ子】▼▼▼

観世左近 二十四世
「よくそ能の家に」

蒲原有明
「松浦あがた」等一〇篇

木内高音
「やんちゃオートバイ」

菊池寛
「恩讐の彼方に」「真珠夫人」「父帰る」等五二篇

岸田国士
「文壇波動調欄記事」等三三〇篇

岸田劉生
「美術上の婦人」等三篇

北一輝
「子に与ふ」

北原白秋
「愚ひ出 抒情小曲集」「邪宗門」等一〇篇

北村透谷
「楚囚之詩」等三四篇

紀貫之
「土佐日記」

木下尚江
「火の柱」等一〇篇

木下柰太郎
「海郷風物記」「南蛮寺門前」等一〇篇

木下利玄
「山陰の風景」

キプリングラチャード
「幻の人力車」

北原白秋

金子ふみ子
「父」

狩野直喜
「支那研究に就て」等三篇

狩野亨吉
「天津教古文書の批判」等五篇

加能作次郎
「恭三の父」等二篇

加福均三
「希臘及び羅馬と香料」

上司小剣
「鱧の皮」

嘉村磯多
「業吉」等四篇

鴨長明
「方丈記」

河合栄治郎
「二六事件に就て」

河上肇
「放翁鑑賞」等五篇

川上眉山
「書記官」

川端茅舎
「夏の月」

河東碧梧桐
「南予枇杷行」

カンシーマストウキ
「スワデンの誓」等六篇

タゴール(左)とカンジー

「富田倫生講演」ムービー

2004年4月25日、東京国際ブックフェア 2004 デジタルパブリッシングフェアの、ボイジャー・新潮社・筑摩書房・NTTソルマーレ・講談社・東芝、共同ブースで行なわれた富田倫生講演の記録です。

- ・「movie」フォルダの中の tomita.wmv (Windows)
- ・「movie」フォルダの中の tomita.mp4 (MacOS、QuickTime がインストールされている Windows)

「著作権保護期間の延長に反対します」ムービー

青空文庫では、夏目漱石や、芥川竜之介、太宰治などの作品を、誰でも自由に読むことができます。この「自由」は、作品を保護する期間を作者の死後50年までとし、そこから先は制限をゆるめて、利用を積極的に促そうと決めている、著作権制度のためものです。

この保護期間を、死後70年に延長しようとする検討が、一部の権利者団体と、米政府の要求を受けて始まりました。私たちすべてにとっての「自由」を、古い側にもう20年分追いやり、せばめてしまう延長に、青空文庫は反対します。

- ・「movie」フォルダの中の aozora_chosakuken.wmv (Windows)
- ・「movie」フォルダの中の aozora_chosakuken.mov (MacOS、QuickTime がインストールされている Windows)

「青空文庫10歳」ムービー

2007年7月7日、青空文庫は10周年を迎えました。そのパーティ会場で上映した青空文庫の軌跡を綴るスライドショームービーです。

- ・「movie」フォルダの中の aozora10.wmv (Windows)
- ・「movie」フォルダの中の aozora10.mov (MacOS、QuickTime がインストールされている Windows)

動作環境

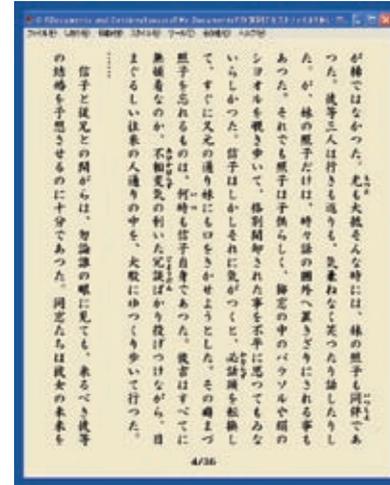
Windows XP, Vista : DVD-ROM ディスクドライブを搭載したマシン
Macintosh OSX 10.3 以上 : DVD-ROM ディスクドライブを搭載したマシン
注意

この付属DVD-ROMは、(DVD-ROM ロゴ)のマークの付いたDVD-ROM ディスクドライブで再生して下さい。CD-ROM/RW ディスクドライブでは再生することができません。

DVD-ROMに納められているその他のコンテンツの説明

③ テキストビューワで作品を読む

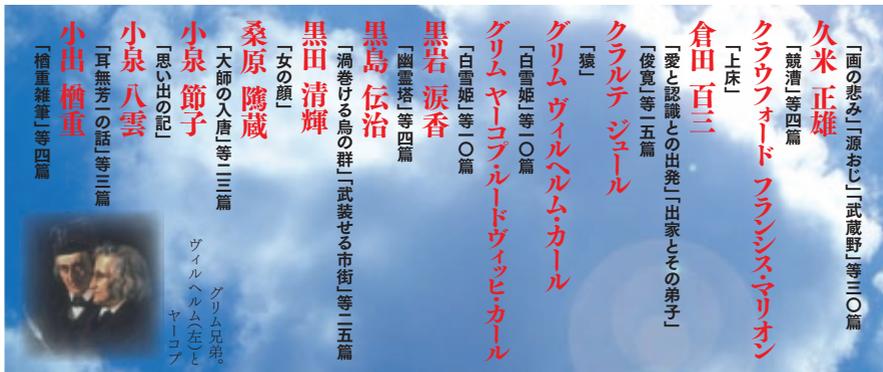
青空文庫にあるテキストファイルを読むビューワは、いろいろな人の手によって数多く開発されています。どのようなソフトがあるかは、鈴木厚司さんのホームページ (<http://www.sky.sannet.ne.jp/at-sushi/aozora/viewer.html>) に詳しく紹介されています。



「鴉」さん作、テキストビューワ「扉〜とびら〜」
<http://karasu.xrea.bz/>



糸口(itoguchi)さん作、テキスト縦書きビューワ「smoopy」
<http://site-clue.static.jp/>



青空文庫一〇年記

一九九七年初頭、エキスパンドブックと名付けられた電子本の愛好者の中から、電子図書館の実験サイトを作ろうというアイデアが生まれた。以来一〇年間で、試みはどのような道筋をたどり、今日に至ったのか。青空文庫一〇年の歩みを振り返り、その到達点と今後の課題を探る。

八巻美恵 編

1 青空文庫誕生前史——始まりは、いつも人の出会い

電子図書館の実験サイト

一九九七年三月、横浜の中華料理店でささやかな会合があった。集まったのは、富田倫生、野口英司、八巻美恵、らんむろ・さていの四人。インターネットに電子図書館の実験サイトを開設しようというのが、その日のテーマだった。気楽な食事会ではあったが、どこから手を付けたらいいか、どんなしくみにしようか、これから何ができるか、話は尽きなかった。

図書館の名称は、富田の発案に異論はなかった。見上げれば遠く広がる「青空」と、手を伸ばせばそこにある「文庫」という言葉をつなげた極シンプルなものだった。この会合以前に、メンバー同士がメールをやり取りするうちに、いつしか実験サイト開設の試みは「青空文庫プ

ロジエクト」と呼ばれていたのである。

青空文庫——どこか懐かしさを感じるこの名前が電子図書館のその後を方向づけていった、と今では言える。

当時、富田が考えていたことの一つに、絶版になってしまった本、経費の点などで出版できそうにもない本を電子化してインターネット上に公開する、ということがあった。これが広く浸透すれば、従来の出版社・取次店・書店とは違う流通ができる。つまり、自分を含めた多くの書き手に、作品発表の機会を増やせると考えたのだ。そこでは、著作によってお金を得るということより、広く将来にわたって作品が読まれていくことに重きを置いていた。

ノンフィクション作家の富田には、処女作である書き下ろし文庫の『パソコン創世記』（一九八五年）が版元の文庫分野からの撤退によって廃刊になったという経験がある。同書はその後、追加取材のうえ別の出版社から刊行されたが、そのときの版元の対応にも、富田には納得できないものがあった。

八巻には、また雑誌をつくりたいという思いがあった。インターネット上の雑誌なら、なにより制作費を抑えることができる。八巻は、仲間と一緒に一九七〇年代の終わりから八〇年代の半ばまで『水牛通信』という雑誌をつくっていた。原稿料や印税収入を第一目標とはしない書き手がいることも、フリーランスの編集者である八巻の知るところであった。

野口にとって、この実験サイトは、インターネット上に電子本のアーカイブをつくっていくことだった。紙の本と同じように、縦書きになり、ルビ（振り仮名）が付き、ページをめくるように読んでいくことができる電子本の作成ソフトウェアがある。これを利用すれば、パソコンでの読書も苦にならないはずだ。その電子本「エキスパンドブック」のコンテンツをネット上に増やしていく——これは、読書の形を変えるパイオニアワークになるんじゃないか。野口の

甲賀 三郎

「支倉事件」等二篇

幸田 露伴

「蒲生氏郷」「五重塔」
「突貫紀行」等三五篇

幸徳 秋水

「死刑の前」等五篇

ゴーゴリ ニコライ

「狂人日記」等三篇

ゴーチエ テオフォル

「クラリメント」

郡 虎彦

「道成寺」(幕劇)

ゴーリキー マクシム

「セツァマニ」

ゴールドマン エマ

「婦人解放の悲劇」

小金井 喜美子

「兄の帰朝」

小酒井 不木

「恋愛曲線」等一六篇

小島 烏水

「梓川の上流」等一四篇

小林 多喜一

「蟹工船」
「党生活者」
「防雪林」等三篇

小舟 勝二

「扉は語らず」

小村 雪岱



幸田露伴

「泉鏡花先生のこと」

ヨレンコ ウラジミール・カラクテイオノヴィチ

「樺太脱獄記」

齋藤 茂吉

「念珠集」等二篇

齋藤 緑雨

「かくれんぼ」等一篇

酒井 嘉七

「京鹿子娘道成寺」等二篇

堺 利彦

「獄中生活」等七篇

坂口 安吾

「青鬼の禪を洗う女」
「桜の森の満開の下」
「墮落論」等一九八篇

坂本 竜馬

「船中八策」

佐左木 俊郎

「或る嬰兒殺しの動機」等三四篇

佐々木 直次郎

「ボー」「アンシャ一家の崩壊」
「訳、等二篇

佐々木 味津三

「右門捕物帖」
「旗本退屈男」等五三篇

佐藤 垢石

「泡盛物語」等七七篇

佐藤 紅緑

「ああ玉杯に花うけて」

期待は大きかった。

らんむろは、文学や演劇や映画が大好き。かつて英国の漱石博物館が募集した夏目漱石作品の入力ボランティアをやったこともある。だから、野口からの誘いに喜んで手を挙げたのだった。

エキスパンドブックに魅せられて

富田たちをつなぐキーワードは、「エキスパンドブック」だった。この「エキスパンドブック」をつくるツールキットは、簡単に言えば、電子テキストを「本」の様式を持った「電子本」にまとめ上げるソフトウエアで、音楽や動画をリンクさせる拡張IIエキスパンド機能も付いていた。米国のボイジャー社が開発したもので、日本では一九九二年にジョイント・ベンチャーにより設立された株式会社ボイジャー（通称ボイジャー・ジャパン）が、その日本語版の開発・販売を行ない、九五年にリリースされたエキスパンドブック・ツールキットIIは、縦書き・ルビ対応を可能にした画期的なものだった。

八巻は、設立間もないボイジャーで電子本の編集を手伝っていた。だから、日本語版エキスパンドブック・ツールキットができたが、ついでに過程をリアルタイムで体験していた。富田の場合は、電子本の書評の仕事でエキスパンドブック・ツールキットのことを知り、そのコンセプトと機能に魅かれ、九三年には日本語版を開発中のボイジャーに出入りするようになった。ちなみに、富田は九五年に同社から電子本『パソコン創世記』を刊行している。

当時のボイジャーは、電子出版に関心を持つ人たちのサロンと化していた。エキスパンドブックに可能性を求める電子本作家や編集者が集まり、また、出版社や印刷会社からも注視されていたのである。社長の萩野正昭自身、リーダーディスクのソフト会社にいるときに、米国ボイジャー社の創業者ポプ・スタインと出会い、その「拡張する本」に魅せられて、会社の同僚

三人とボイジャーを立ち上げたのだった。

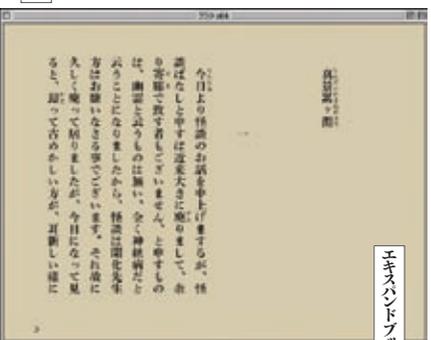
野口は、萩野が独立する前の会社の部下だった。萩野の目には、まだ高嶺の花だったマッキントッシュ・コンピュータを買い込み、業務外に何やらやっている奇妙な若者と映っていたらしい。その野口も萩野に誘われて、九四年五月にはボイジャーの社員となっていた。

そして、九七年二月、青空文庫開設の契機が訪れた。富田が『本の未来』（アスキー出版局）を出版するとき、野口はその制作を手伝った。紙の本である『本の未来』を全文エキスパンドブック化して、付録のCD-ROMに収めるのが野口の仕事だった。

あるとき野口は、長文のテキストを公開しているウェブサイトを知らないかと富田に尋ねた。エキスパンドブックのブラウザにウェブ上のテキストを流し込む機能が付いたので、その中に入れるコンテンツが欲しかったのだ。



エキスパンドブック版『真景累ヶ淵』表紙



エキスパンドブック版『真景累ヶ淵』本文

佐藤惣之助

「荒磯の興味」

里村欣三

「苦力頭表情」等二篇

サマンアルペール

「クサンチス」

沢田正二郎

「私の電之助感」

三遊亭円朝

「塩原多助旅日記」真景累ヶ淵

「文七元結」等四篇

ジラアーン・トマ

「アメリカ独立宣言」

柴田流星

「残される江戸」

島本健作

「鯨漁場」等六篇

島本 赤彦

「諏訪湖畔冬生活」

島崎 藤村

「千曲川のスケッチ」『破戒』

「夜明け前」等三七篇

島田 清次郎

「地上」等二篇

島村抱月

「序に代えて人生観上の自然主義を論ず」

清水 紫琴

「移民学園」等三篇



島崎藤村

下村 湖人

「次郎物語」等五篇

下村 千秋

「早天美景」等二篇

十二谷 義三郎

「青草」等一篇

シニツレル アルツール

「アンドレアスタマイエルが遺書」

素木 しづ

「三十三の死」等二篇

白鳥 庫吉

「尚書」の高等批評」

白柳 秀湖

「厭夫日記」

新青年編輯局

ドイル「臨時急行列車の紛失」訳

スワイフト ジョナサン

「ガリバー旅行記」

末弘 巖太郎

「役人学三則」等二篇

須川 邦彦

「無人島に生きる十六人」

菅原孝標女

「更級日記」

杉田 久女

「大正女流俳句の近代的特色」等七篇

鈴木 梅太郎

「ビタミン研究の回顧」

ネットで公開されていた「山月記」

富田から、岡島昭浩福井大学助教授(当時)の「日本文学等テキストファイル」のサイトを教えてもらった野口は、早速アクセスしてみた。

国語学者の岡島が公開していたのは、古典文学をはじめ著作権の保護期間の過ぎた国文学がほとんどだった。岡島自身が入力したのもあれば、他大学の研究室にリンクを張って公開しているものもある。公開作品一覧表には、あまり文学に馴染みのなかった野口でさえ知っている作家の名前が並んでいた。芥川龍之介、森鷗外、夏目漱石……。高校生のころ、国語の教科書で読んで印象深かった中島敦の「山月記」もあった。

野口は驚いた。著作権の保護期間が過ぎていても、ネット上に公開していいものだろうか。富田に聞くと、グレーな部分もあるが問題はないと言う。そこから話は、インターネット電子図書館に及んだ。

米国では七一年に、当時イリノイ大学の学生だったマイケル・ハートによって、プロジェクト・グーテンベルクが始まっている。このプロジェクトは、著作権の切れた名作・古典などいろいろな分野の文書をボランティアが電子化して、インターネット上に公開するという活動だ。そのうち日本でも、プロジェクト・グーテンベルクのような電子図書館づくりが動きだすだろう——富田の話は、野口を喜ばせた。

野口は、エキスパンドブックを使った電子図書館の可能性を見出した。その構想を富田に話すと、実行するなら自分も加えて欲しいと返された。八巻、らんむろにも、この構想を伝えると、ぜひ参加したいと返事がきた。横浜で四人が集まった日の、ひと月ほど前のことである。彼らの反応に意を強くした野口は、岡島にテキスト提供依頼のメールをする。

「私たちは、インターネット上に図書館を開きたいと考えています。いろいろな人が自由に電子本「エキスパンドブック」をダウンロードすることができて、コンピュータの画面上で読めるようにしたいのです」

岡島から快諾のメールが来た。条件は、テキストの入力者を明示することのみ。野口は、すぐに「山月記」をダウンロード、エキスパンドブック化して電子図書館の見本ページを作成、自らのサイトにアップした。富田たち三人は、これを事前に目にしてから「横浜会議」に臨んだわけである。だから、「青空文庫」開設にはリアリティがあった。

初めの一歩は五冊の蔵書

二葉亭四迷「余が言文一致の由来」、森鷗外「高瀬舟」、与謝野晶子「みだれ髪」(明治三四年版と昭和八年版)、中島敦「山月記」——野口は、エキスパンドブック化したこの五作品とともに、電子図書館の仮サイトを五月末までにつくりあげる。もととなったテキストは、すべて岡島のサイトにあるものだった。URLは、野口の所属するボイジャーのドメイン内に置いた。いわば会社公認で社屋の一室を開放して、エキスパンドブックの書棚を設けるようなものだった。それ以外にも五冊は少ない。けれど、こうして青空文庫は正式オープンに向けてさらに歩を進めた。

同じころ富田は、「われわれは青空文庫で何を目指しているか」を文章化する作業に取り組んだ。この文章を作成することにより、臆気な電子図書館計画に、はつきりとした方向性が示されることとなった。

また、当時は青空文庫を「道しるべ」とする構想もあった。インターネットの普及に伴い、たくさんの人がホームページをつくって自分の作品を公開しはじめている。そうした作品の在り処を青空文庫で示していきたい。これは、富田が野口に問われて、ネット上に長文テキスト

鈴木行三

三遊亭円朝「真景累ヶ淵」校訂、等二篇

鈴木三重吉

「古事記物語」湖水の女」

「大震災記」等二五篇

薄田泣菫

「神木虫魚」等三六篇

ステューブソン、ロバート・ルイス

「ジークル博士とハイド氏の怪事件」

ストックトン・フランシス・リチャード

「幽霊の移転」

ストリンドベリ、アウグスト

「真夏の夢」

関寛

「開牧場創業記事」等三篇

関根金次郎

「本因坊と私」等三篇

瀬沼夏葉

チエーホフ「六号室訳

相馬愛蔵

「私の小売商店」等二篇

相馬黒光

「商人として」

相馬泰三

「六月」

添田嘯蟬坊

「そばないを食」

大宰治撮影 田村茂

た 高神覚昇

「般若心経講義」

高田保

「貸家を探す話」等二篇

鷹野つき

「草敷」等四篇

高村光雲

「幕末維新懐古談」等八〇篇

高村光太郎

「智恵子抄」等三篇

高山樗牛

「滝口入道」等五篇

竹内勝太郎

「淡路人形座訪問」

武田麟太郎

「日本三文オペラ」等七篇

竹久夢二

「どんたく」「砂がき」等二七篇

太宰治

「斜陽」「人間失格」「富嶽百景」等二二篇

田沢稲舟

「五大堂」

立原道造

「優しき歌」等四篇

田中貢太郎

「日本天変地異記」等二四篇

を探し回った体験から生まれた構想だった。そして実際、そんなサイトを見つけては青空文庫への登録を依頼する作業を地道に行なっていた。人と人の出会いがあり、点と点が結ばれていた。インターネット時代のネットワークが、また一つ、ここに構築されようとしていた。

2 開館した青空文庫——やって来た人のチカラで

青空文庫の提案

九七年八月に入って、青空文庫のコンセプトを示す「青空文庫の提案」が七月七日付けで公開された。文末には「呼びかけ人」として、『横浜会議』の四人の名前が並んだ。九月には青空文庫のアドレスも、それまで暫定的に使っていた野口のURLから、専用のURLへ移され、「青空文庫ホームページ」が正式に始まる。トップページには、青空文庫の提案から冒頭二行が掲げられた。

電子出版という新しい手立てを友として、私たちは〈青空の本〉を作ろうと思います。
青空の本を集めた、〈青空文庫〉を育てようと考えています。

青空文庫では、公式な「誕生日」を九七年七月七日としている。このメッセージを産声として、青空文庫が育っていったからだ。最初の五冊のエキスパンドブックも、登録日をこの七月七日とした。開館にあたって、呼びかけ人たちは、いくつかのルールを設けた。著作権法によって定められた保護期間の終了した作家の作品と、たとえ保護期間内でも作家が「金銭的な見返りを求め

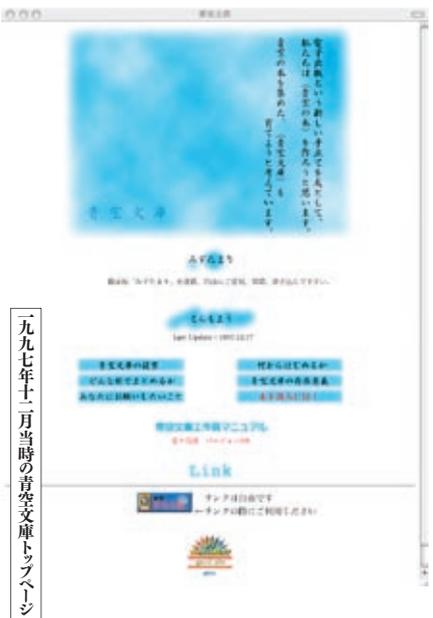
ない」と決めて公開する作品、この二つが〈青空の本〉であること。また、『蔵書』の形式はエキスパンドブック版ではなく、インターネットにおいて一般的なHTML版、電子テキストの基本でもあるテキスト版の三つとするよう務めること。

時の流れとともに、このルールには変わってしまった部分がある。エキスパンドブック版は、一企業の成果物であるフォーマットが将来も有効である保証がないこと、読むのに便利なテキストビュー（閲覧用ソフトウェア）が各種できたことなどを理由に、二〇〇二年五月、新規作成を中止した。併せて、ルビ付き・ルビなし両方で作成していたテキストをルビ付きだけとし、HTML版は新規登録作品よりXHTML版に変更することとした。これで、『エキスパンドブック図書館』という当初のイメージはなくなり、新たな電子図書館像を模索していくことになる。

また、開館当初は、著作権切れの〈青空の本〉と著作者自身が公開を望む著作権存続中の〈青空の本〉の収蔵作業は車の両輪のように考えられていたが、現在では後者の新しい収蔵は諸般の事情でストップしている。

青空文庫工作人員マニュアルの作成

青空文庫ホームページに最初にくきたコーナーは、九七年一〇月開設の「そらもよう」だった。これは、青空文庫からのお知らせを載せるためのもので、一〇月以前の主要な出



一九九七年十二月当時の青空文庫トップページ

田中早苗 モーリス「或る精神異常者」訳

田中正造 「直訴状」等五篇

田中英光 「オリンボスの果実」等三篇

谷譲次 「踊る地平線」等三篇

種田山頭火 「草木塔」等二篇

田畑修二郎 「石ころ路」等七篇

田村松魚 「田村松魚の言葉」

田村俊子 「木乃伊の口紅」

田山花袋 「田舎教師」
「重右衛門の最後」
「蒲団」等五篇

談洲楼 燕枝 二代 「燕枝芸談」

ダンテ アリギエリ 「神曲」等三篇

チーホフ アントン 「六号室」等三篇

チヌスタートン ギルバート・キース 「金の十字架の呪い」等三篇

田山花袋
チーホフ

近松秋江 「つり香」等九篇

知里幸恵 「日記」

チリコフ オイゲン 「板ばさみ」

陳玄祐 「情娘」

塚原 洪柿園 「兵馬倥傯の人」

辻潤 「浮浪漫語」等三篇

辻村伊助 「登山の朝」

辻村 もと子 「クリスマス・カロール初版本
(挿絵|| John Leach)」

土田杏村 「早春箋」

網島梁川 「私の書斎」等二篇

坪内逍遙 「国民性と文学」等二篇

津村 信夫 「十歳以前に読んだ本」等二篇

ツルゲーネフ イワン 「狼」等三篇

デイケンズ チャールズ 「クリスマス・カロール」等三篇

デイケンズ
坪内逍遙

来事も書き込んだうえで、スタートさせた。翌一月には、掲示板「みずたまり」ができた。富田たちが特に時間をかけて取り組んだのが、同年二月にアップした「青空文庫作業員マニュアル」である。「作業員」とは、「青空の本」の入力や校正、ファイル作成などを行なう人たちのことで、このマニュアルは入力と校正の作業を担うボランティアのための手引き書だ。

最初、こうした作業は、『横浜会議』に参加した四人だけで、手分けして行なうつもりだった。章立て、字下げ、ルビの付け方などのテキスト入力方法は、そのつど取り決めていく予定だったのである。しかし、試しにホームページに「入力・校正ボランティア募集」を掲げたところ、手を挙げてくれる人が現れた。そうになると、統一した入力方法が必要になってくる。呼びかけ人たちは、マニュアル作成は避けられないと判断した。

そんなころ、視覚障害者読書支援協会の関係者から、青空文庫にリンクした旨のメールが届いた。同協会では、ボランティアによる電子テキスト化に取り組み、入力された基本データをもとに、拡大写本や点字本の制作、本の音声化などの活動を行なっているという。同協会のホームページを見た野口は、青空文庫のテキスト入力方法を同じものにできないかと考えた。同じにすれば、青空文庫のテキストを協会でも使えることになるからだ。

野口は、東京の田町で開かれていた勉強会に参加し、会員用の『原文入力ルール』を貰う。九四年の初版以降、試行錯誤のなかで改訂新版を重ねてきた労作だった。そして、この冊子を参考にして、「青空文庫作業員マニュアル」を作成したのだった。以降、こちらも、改版を重ねていくことになる。

ちなみに、ルビを《》内に入力する形式を「青空文庫ルビ形式」と呼ぶことが多いが、これも同協会の入力ルールに合わせたものだから、「視覚障害者読書支援協会ルビ形式」と呼ぶべきかもしれない。

来館したさまざまな人たち

青空文庫は、ボイジャーとの関わりから、電子出版に興味を持つ人たちからはそれなりに注目されていた。開館前から富田がシンポジウムで構想を語り、開館直後にはボイジャーの萩野が編集人に名を連ねる『季刊 本とコンピュータ』で紹介された。以降、主にコンピュータ系の雑誌にたびたび登場する。

九七年一月読売、同年二月日経、九八年三月読売、同年一二月産経……と、新聞にも青空文庫の紹介記事が載った。テレビで紹介されたこともあった。そのつどアクセス数が増え、いろんなタイプの人たちが青空文庫を訪れるようにもなった。

「青空文庫の提案」に感じるものがあつたのか、パソコンにさほど明るくない人たちも、著作権切れの《青空の本》づくりを申し出てきた。それにはマニュアルが役に立った。

プロの校正者や編集者、現役の国語教師も作業員に志願してきた。また、呼びかけ人の働きかけで、作家、詩人、芸術家たちも自分の作品を《青空の本》として棚へ納めにやってきた。

高校一年生の少年が、シャロック・ホームズの短編を自分で翻訳して寄こしたこともある。この少年、大久保ゆうは大学進学後、「京都大学電子テキスト研究会」を立ち上げ、作業員のユニット化という形で入力・校正作業の効率化を図ろうとしている。

パソコンに明るいどころか、ソフトウェアの開発をこなせる人も青空文庫に出入りするようになった。電子出版の関係者だけではなく、青空文庫をきっかけに、電子テキスト作成時のツールやその「読書」の利便化を図るソフトウェアをつくりあげるプログラマーが現れたことは特筆していいだろう。

デカルトルネ

【省察】

手塚 寿郎

ワラス「純粋経済学要論」訳

テランアルフレッド

「シャロットの妖姫」

デフォーダニエル

「ヴァイル夫人の亡霊」

寺島 柢史

「怪奇人造島」

寺田 寅彦

「柿の種」等 八四篇

土井 晩翠

漱石さんのロンドンにおけるエピソード等五篇

ドイル アーサー・コナン

「グロリアスコット号」等 〇篇

ド・ヴィルターヴ

ガブリエル・リシナンヌバルボ

「ラ・ベルとラ・ペイト（美し姫と怪獣）」

峠 三吉

「原爆詩集」

ドーデ アルフォンス

「村の学校（実話）」

戸川 秋骨

「道学先生の旅」

戸川 明三

小泉八雲「耳無芳一の話」訳 等三篇

徳田 秋声



ドイル

「あらゆる「微」縮図」等 八篇

「不如帰 小説「みみずのはこ」等 九篇

戸坂 潤

「科学的精神とは何か」等 七篇

ドストエフスキー フィョードル・ミハイロヴィチ

【譯】

富田 木歩

「小さな旅」

豊島 与志雄

「野ざらし」「山吹の花」

ユゴー「ミゼラブル」訳 等 一九七篇

ドラ・ラメー マリーールーズ

「フランタースの犬」

トルストイ レオ

「イワンの馬鹿」等 二篇



トルストイ

内藤 湖南

「早弥呼考」等 三五篇

直木 三十五

「南国太平記」等 九篇

中井 正

「二世紀の頂における図書館の意味」等 二六篇

長岡 半太郎

「物理学革新の二つの尖端」等 二篇

水崎 貢

「組合旗を折る」

青空文庫のリニューアル

さまざまな興味や技術を持った人たちが来館し、そのなかには工作人員として活動に参加する人もいれば、外からサポートする形で青空文庫にツールを提供する人も現れる。また、「世話人」として青空文庫の運営に深く関わるようになる人もいる。

このような人たちの情報の交換の場として、二〇〇〇年四月には、青空文庫メーリングリストを開設した。これを使って、テキストの入力、校正時の疑問点だけではなく、青空文庫の運営に関しても協議される。青空文庫として統一した見解を出すときは、必ずこのメーリングリストで話し合うことになっている。

このメーリングリスト開設のころ、もう一つの大きな動きがあった。それは、青空文庫に所蔵される作品のデータベース管理システム構築だった。青空文庫の蔵書数が飛躍的に増えはじめてために、作品の管理を手作業で行なうことに無理が生じてきたのだ。

まず野口が基本構造を考え、その後、富田やソフトウェアのシステム開発を業とするLUN A C A Tが中心となってメーリングリストで討議し、プログラマーの手を借りて二〇〇二年秋にデータベースは完成した。これにより、作品登録・管理がシステム化され、インデックスや図書カードも自動的に生成されるようになった。

データベース化に伴い、ホームページも整備され、現在のような「つくり」になった。トップページに置かれているコーナーだけで二五を越す。

「メインエリア」は、図書館で言えば書架・閲覧室の部分。「掲示板」「青空文庫別館」「資料室」には、来館して常連になった人や側面から支援しようといった人たちが開設してきたコーナーもある。

インターネット図書館「青空文庫」の特色

青空文庫の蔵書は、日々増えつづけている。現在の来館者は、スタート時がわずか五冊だったことなど想像もできないだろう。作品数が一〇〇〇を越えたのは二〇〇〇年六月、〇三年九月には三〇〇〇を越え、青空文庫満七歳の誕生日にあたる〇四年七月には四〇〇〇を越えた。〇五年七月七日には四七〇六を数える。

青空文庫の利用者が多いのは、単純にインターネット上の図書館に優位な点が多いからだろう。わざわざ出向く必要がない、閉架や貸し出し中の本がない、検索機能を利用して調べることができるなど、その利点は数多く存在する。

また、日本語を表示できる環境があれば、海外にいても利用できることも利点の一つだ。たとえば、フィリピンに派遣された青年海外協力隊員が、「日本語の本」を読みたいがために青空文庫を利用したりする。青空文庫の読書だけでは飽き足らなくなって、外国滞在中に入力・校正を行なう人もいる。

3 青空文庫に突きつけられた課題——考えつづけながら、継続していく

お金と人をめぐる問題

青空文庫は、来館者からお金を取らない。これも最初に取り決めたルールである。しかし、入力や校正が無償のボランティアであつたとしても、サーバーの使用料や図書費、事務用品等の消耗品代など毎月の出費がある。また、一定の責任を持って管理・運営に当たる者が必要に

中里介山

「大菩薩峠」等四六篇

中島敦

「山月記」「名人伝」「季陵」等二六篇

中島孤島

「グリム」杜松の樹」訳等二篇

長塚節

「土」等三篇

中戸川吉一

「イボタの虫」

中浜哲

「杉よ！ 眼の男よ！」

中原中也

「在りし日の歌」「山羊の歌」等五篇

夏目漱石

「坊っちゃん」三四郎「吾輩は猫である」等一〇〇篇

南部修太郎

「阿片の味」等二〇篇

新美南吉

「おじいさんのラッパ」「久助君の話」

西尾正

「こん狐」等六三篇

西田幾多郎

「陳情書」等二篇

仁科芳雄

「善の研究」等二篇

新渡戸稲造

「日本再建と科学」等五篇



新渡戸稲造



夏目漱石
(撮影「小川」真)

日本童話研究会

「教育の目的」
「アミーチス」母を尋ねて三千里」訳

野上豊一郎

「西洋見学」等二七篇

野口雨情

「青い眼の人形」等三篇

野口米次郎

「能楽論」

野呂栄太郎

「名人上手に聴く」等一七篇



野口雨情

は パーネット フランス ホジソン エリザ

「小公女」

ハイヤーム オマル

「ルバイヤート」

萩原 朔太郎

「青猫」二月に吠える「猫町」等三篇

橋本 五郎

「地図にない街」等三篇

橋本 進吉

「古代国語の音韻に就いて」等三篇

長谷川 時雨

「旧聞日本橋」等四二篇

波多野 精一

「時と永遠」

浜尾 四郎

「殺人鬼」等五篇



萩原朔太郎

なってくる。そのような経費はどのように捻出しているのだろうか。

青空文庫の収入は、現状では青空文庫上のバナー広告の掲載料のみ。サーバーの使用料などは、ここから支払われることになる。しかし、人件費が出せるほどの収入はないし、もともと管理・運営に対してお金を支払う体制をとってはいない。現在、管理・運営に当たるのは、七、八名ほど。主宰者とみなされるほど青空文庫の顔となっている創設メンバーの富田。「点検部屋」と呼ばれる、入力・校正済みファイルのチェック部門を担当する門田裕志と小林繁雄。入力・校正者の受付担当となっているLUNACAT。他に、「むしとりあみ」で誤植の判定をする「バグ取り司行人」が数人いる。彼らはみな無報酬で作業を行なっている。

かつて青空文庫も有給の専従スタッフを置いたことがあった。その発端は、野口の提案だった。九七年に開館して以来、早くも九八年の半ばには、作業員への対応をはじめとして、青空文庫の維持に多くの時間が必要になり、作品の登録が滞るようになっていた。そんな状況を見かねて、富田ら他の呼びかけ人に、自分が専従となってはどうかと持ちかけたのだった。しかし、専従スタッフは欲しいが、収入がなければ暮らしが成り立たないのではないかと……。

そうしたなか、富田が中心になって、「トヨタ財団」に研究助成を申請する。それが通り、九八年一〇月から二年間、研究助成を受けられることになった。研究テーマは、新しく定める「JIS漢字コード」にかかる調査。申請は研究目的にあったが、助成金を運営費に回すことも動機のうちだった。

野口はボイジャーを退職し、青空文庫の専従スタッフとなった。校正済みのテキストファイルを整えて、ZIP圧縮、HTML化、エキスパンドブック作成、さらに図書カード作成、インデックス作成、「そろもよう」への告知……。仕事はいろいろあった。作業員からの問い合わせに答えること、入力済みテキストをプリントアウトして校正担当の作業員へ発送することも重要な仕事だった。

専従になった日から、野口は毎日、作品をアップすることを心がけた。作品数を増やすことが、何より青空文庫の知名度を高めると考えたからだった。事実、知名度は上がっていき、作業員の志願者も比例して増えていった。専従体制は、上々のすべりだったと言える。ところが、思わぬところから綻びはじめた。作業員への対応が次第に野口の負担となっていたのだ。日々たくさんの見知らぬ人とのメールによる「会話」。想像もできないようなスレ違いが生じることもある。電話で話せたらどれだけ楽だろう。メールの文体からも、声の抑揚で分かるような機微を感じ取ればいいのに……。翌年の夏には、メールボックスを開けることもままならなくなっていた。この野口の不調をきっかけに、呼びかけ人たちは、お金と人の問題を強く意識するようになる。有給専従者を増やすのか？ それを望んだとして果たしてできるのか？ 無償ボランティアである作業員と有給専従者との区別をどうするのか？ すっきりした答えは出なかった。

野口は、しっかりした基礎がなければ堅牢な建物は建たない、たとえ青空文庫を「休館」させることになっても、まず運営基盤を確立させるべきだと主張した。しかし、これは総意とはならず、野口は青空文庫データベース管理システムの基本構造をつくりあげたあと、専従を降ろる。二〇〇二年八月のことだった。前後して、小林繁雄が仕事を辞めて、青空文庫運営の主力となる。当時、カナダのバンクーバーにいた門田裕志も、青空文庫運営に深く関わるようになっていく。

ゆるゆるとした集団がいい

一九九七年の開館時の呼びかけ人は、横浜の会合に出席した富田倫生、野口英司、八巻美恵らんむろ・さていの四人。その後すぐに、絵本作家として著名な長谷川集平が加わり、長谷川の関係から九八年三月には米田利己も加わった。富田の著書『本の未来』に感銘を受けたLUNACATやウェブサイトを「楽(GAKU)」を運営している浜野智が加わったのもこのころである。(そ

浜田青陵

「沖繩の旅」等七篇

林不忘

「丹下左膳」等〇篇

林美美子

「風琴と魚の町」「清貧の書」「放浪記(初出)」等四九篇

葉山嘉樹

「海に生くる人々」等九篇

原勝郎

「東山時代における「縮神の生活」等四篇

原民喜

「壊滅の序曲」「夏の花」「廢墟から」等五二篇

原田皇月

「獄中の女より男に」

ピラスアンブローズ

「妖物」

樋口一葉

「大つこもり」「たけくらべ」

「にりえ」等七篇

平井肇

「『ゴリ』狂人日記」訳、等三篇

平出修

「逆徒」等八篇

平田禿木

「趣味としての読書」

平野万里

「晶子鑑賞」



樋口一葉

平林初之輔

「山吹町の殺人」「文学の本質」について等一四篇

平山蘆江

「大菩薩峠芝居話」

ヒルシラエルドゲオルヒ

「防火栓」

広津柳浪

「今戸心中」等二篇

プーシキンアレクサンドルS

「スベットの女王」

福沢諭吉

「痴我慢の説」等二篇

福田英子

「妾の半生涯」等二篇

福永渙

ガンジー「スワデンの誓」訳、等六篇

藤島武二

「画室の言葉」

婦人文化研究会

ルブラン「探偵小説アルセーヌ・ルパン」訳

二葉亭四迷

「余が言文一致の由来」等二篇

フランスアナトール

「バルタザール」等二篇

別所梅之助

「石を積む」

ローシャール

「猫吉親方」等四篇



二葉亭四迷

の後、呼びかけ人の立場を離れる者もあった。)

青空文庫には呼びかけ人はいるが、代表者はいない。現在「世話人」と呼ばれることの多い管理・運営者は、活動のなかで自然に決まってきた。税務上のみなし法人とはなっているものの、基本的には個人の集まりである。呼びかけ人たちがつくったルールはあるが、NPO法人や任意団体が定めるような規約の類はない。あえて言えば「青空文庫の提案」を憲法として、ことあるごとに青空文庫運営サイドで考えてきた。二〇〇〇年四月以降は、青空文庫メンバーリングリストを活用しているわけである。

呼びかけ人と作業員の名は、「青空文庫を支える人々」で公表している。その数は、五七〇人(〇五年九月二四日現在、団体含む)。ここには、青空文庫からテキストの提供を依頼した人や、ソフトウェア開発で青空文庫に貢献した人などの名も挙げられている。

青空文庫には入会資格のようなものもないし、退会手続きもない。(青空の本)を増やす——この目的のもと、ゆるゆるとした集団で進んでいく。これが、現在の青空文庫のあり方なのだ。お金と人の問題、運営のしかたは、継続課題だと言えるだろう。

入力底本と出版社

著作権切れの作品を入力するにあたって、青空文庫側がその底本を提示することはない。自分の持っている本、図書館にある本、古本、新刊本、何でもよい。だが、今も刊行されている本を使って入力しているのかという疑問も湧くことだろう。

現行の著作権法には、「出版社」の権利については記されていない。著者の原稿から出版物をつくる、全集を編む、文庫化する——といった行為には、権利が発生しないと考えられている。

著者や翻訳者以外で、明らかに権利を持つと考えられるのは、俳句や詩、日記や短編を選別し

て編みあげた「编者」、および、古典文学等で他の伝本と照らし合わせて正誤を判断していくといった作業を行なった「校訂者」だ。「創作性」があるかどうかの判断が決め手になると言えよう。

したがって、编者や校訂者に留意さえすれば、書店の棚に並んでいる本を使っても著作権法上の問題は生じないと考えてよい。ただし、グレーゾーンもあって、このあたりは青空文庫運営サイドでチェックしているのが現状だ。

出版社がどう思うかは別問題である。出版社も企業であり、自分たちの利益を損なうと考える活動に対して否定に動くのは当然というものである。

一方で、出版社から表立って抗議を受けたことは一度もない。青空文庫が営利を目的としたボランティア集団だからなのか、社会的貢献が評価されていることなのか、その辺りは知るすべがない。

4 青空文庫のネットワーク——深まりと広がり、電子テキストを介して

青空文庫のなかに生まれたプロジェクト

青空文庫には、「宮本百合子全集」を入力した柴田卓治のように、大部の作品をすべて一人で入力してしまった例もある。しかし、大作を一人で入力、または校正するには限界がある。自然と、仲間を募って作業をすすめようという動きが出てきた。

たとえば、二〇〇一年には、浜野と八巻が中心になって「小熊秀雄全集プロジェクト」を立ち上げた。〇三年二月に Kompas が立ち上げた「光の君再興プロジェクト」は、〇五年三月に完了。これは、上田英代が「古典総合研究所」で公開していたテキストに作業員が再校正を行

逸見猶吉

「逸見猶吉詩集」

北条民雄

「いのちの初夜」等五篇

ポーエドカー・アラン

「アラン家の崩壊」「黄金虫」

ホルソン ナサエル

「モルグ街の殺人事件」等二〇篇

ファンダ・ブック

「少年・少女のために」等二篇

ホフマンスタール・フーゴ・ラフォン

「チアンの死」

蒲松齡

「聊齋志異」等二篇

細井和喜蔵

「女給」等二篇

穂積陳重

「法窓夜話」

ホフマン・エルンスト・テオドーア・アマード・デウス

「魔宅」 (撮影＝Matthew Brady) ホーソン

堀辰雄

「美しい村」

堀口九方

「かげろふの日記」等二八篇

本庄陸男

「フランシア・ユッペ訪問記」等三篇

白壁

「白い壁」等四篇

牧逸馬

「浴槽の花嫁」等一〇篇

牧野信一

「鬼浜村」等四篇

マクドナルド・ジョージ

「鏡中の美女」

正岡子規

「歌よみに与ふる書」「墨汁一滴」等二六篇

増田雅子

「恋衣」

松永延造

「職工と微笑」等三篇

松濤明

「山想う心」等四篇

松本泰

「宝石の序曲」等五篇

マルサストマス・ロバート

「人口論」等二篇

ゴエクトール・アンリ

「家なき子」等二篇

三上於菟吉

「ドイル「自転車嬢の危難」訳」等九篇

三木清

「哲学入門」等四篇

三島霜川

「解剖室」等六篇

なって、青空文庫に登録しようという試みだった。ほかにも、「原民喜プロジェクト」「まれびと折口信夫プロジェクト」などが進行中だ。

大部の作品について言えば、中里介山『大菩薩峠』や岡本綺堂『半七捕物帳』シリーズは、特にプロジェクトは組まれてはいないが、それぞれ中心的な役割を果たした作業員がいる。

ちなみに、『大菩薩峠』の最初の巻が登録されたのは二〇〇一年五月、最後の巻は〇四年五月の登録。この年七月七日の朝日新聞には、〈ネット図書館4000冊 ボランティアに支えられ7周年「青空文庫」「大菩薩峠」も全編〉という大見出しで紹介されている。

また、『半七捕物帳』の作品が最初に登録されたのは一九九八年七月、全六九話が揃ったのは〇二年五月のこと。大久保ゆうは、シャロロキアン（シャロロック・ホームズ愛好家）ならぬハンシチアンに感謝の気持ちを込めて、『The Complete 半七捕物帳』を開設。このサイトを見れば、作者執筆順・事件発生順、事件発生日と解決日が分かる。

協力者による青空文庫の充実

ゆるゆるとした集団で成り立つ青空文庫は、そこに参加する人のキャラクターも多彩になる。名前一つ取っても、本名だったりハンドルネームだったり、本名とハンドルネームを使い分けていたり、ハンドルネームを複数持っていたりさまざまなのである。

ウェブサイトの設置やソフトウェアの開発等で、青空文庫に関わる人たちも多い。こうした人たちが、青空文庫を支え、読者や作業員を増やし、蔵書の充実にも寄与していると言える。

たとえば、もりみつじゅんじは、青空文庫内にある「随筆計画2000」や「青空文庫検索ページ」を作成した。鈴木厚司は、「テキストビューワー」一覧や「青空文庫年表」などを含む「青空文庫コンテンツ」のページを公開している。PoorBook G3 99 は、収録作品に出てくる外字

を収めた「外字注記コレクション」を作成している。

たとえば、プログラムを専門とする結城浩は、「旧字体置換可能チェッカー『校閲君』」など作業員向けツールを用意し、加賀是空は、「クリック Aozora」という作品ファイルのダウンロードを簡略化するソフトウェアを開発し、ともにネットで無料提供している。

たとえば、言語学と日本語教育が専門の大野裕は、「青空文庫関係ファイル」というページを用意し、「青空文庫新着情報RSS」や「XHTML変換スクリプト」を提供している。

ゆらぎ、hongming による「太郎で『青空文庫』というサイトもある。hongming は、作業員同士の情報共有の場として、掲示板「こもれび」も運営している。

大久保ゆう訳『あらしの王子さま』
(LE PETIT PRINCE アントワネットサンテテグシエリ作)



http://www.alz.jp/221b/aozora/le_petit_prince.html

大野裕と一緒に「読書blog——すいへいせん」を始めたten。あとから加わった、古くからの作業員であるJuliaたちと、新鮮な視点で青空文庫の収録作品を紹介している。

現在、青空文庫へリンクを張っているサイト一覧を見ると、そのバラエティ豊かさに驚かされる。大学の図書館・研究室、各種研究所、学校、会社……、百花繚乱の個人のホームページと、その数も膨大なものになる。自由に開かれていく——それがインターネットの本来の姿なら、青空文庫はインターネットの王道を行くものなのかもしれない。

（「インターネット図書館青空文庫」（はる書房二〇〇五）所収「青空文庫ものがたり」からの抜粋）

水谷 まさる

「歌時計」等三篇

水野 仙子

「犬の威厳」等一五篇

水野 葉舟

「遠野」等八篇

三田村 鳶魚

「中里介山の『大菩薩峠』」等二篇

南方 熊楠

「十二支考」等八篇

水上 滝太郎

「貝殻追放」等一八篇

宮城 道雄

「心の調へ」等三篇

三宅 幾三郎

ホーソーンワンダ・ブッカー——少年・少女のために——「訳

三宅 花圃

「敵の驚」

宮崎 湖処子

「空家」等二篇

宮沢 賢治

「風の又三郎」「銀河鉄道之夜」「セロ弾きのゴーシュ」等二六篇

宮武 外骨

「日本流行の毒毒と其裏面談」

宮原 晃一郎

「虹猫と木精」等二篇



宮城道雄

宮本 百合子

「獄中への手紙」「播州平野」

村井 政善

「貧しき人々の群」等一〇二七篇

紫式部

「源氏物語」等五七篇

村山 槐多

「悪魔の舌」等三篇

モーパッサンギド

「初雪」等七篇

森 鷗外

「うたかたの記」「高瀬舟」「舞姫」等九四篇

森田 草平

「四十八人目」等三篇

森本 薫

「女の生」等三篇

文部省

「あたらしい憲法のはなし」



森鷗外

八木 重吉

「秋の腫」等一篇

矢崎 嵯峨の舎

「初恋」

矢田 津世子

「反逆」等三篇

藪野 椋十

「二握の砂」序

著作権保護期間延長に反対

作品で儲ける権利は、作者の死後五〇年まで。
この仕組みを生かし、青空文庫は権利の切れた作品を公開している。
ところが今、一部の権利者団体とアメリカの圧力を受けて、保護期間を死後七〇年にのばそうとする検討が進められている。延長が実現したとき、青空文庫が失うものはなんなのか。

あなたが手に取っているこの冊子には、値段がついていない。『青空文庫全』は、公共図書館と大学、短大、高専、高校の図書館向けに、青空文庫が作って贈ったものだ。インターネットの青空文庫 (<http://www.azora.gr.jp>) を利用する際も、お金はかからない。

誰にでも門戸を開いた青空文庫の「読む自由」は、作品で儲ける権利の有効期限を、作者の死後五〇年までに限定した、著作権制度のたまものだ。

保護されているあいだは、しっかり守って創作を励ます。けれど以降は、自由に複製し、インターネットで公開できるようにして、日本中、世界中の誰もが広く作品に触れるようにする。著作権保護の国際的な枠組みであるベルヌ条約の基本設定にそって、日本の著作権法は、その境目を死後五〇年においてきた。

ところが今、保護期間をさらに二〇年延ばし、作者が死んでから七〇年までにしようとする検討が、一部の権利者団体とアメリカの要求を受けて、進められている。これが実現すれば、

青空文庫は以降二〇年間、新たに著作権切れを迎える作品を、登録できなくなる。万が一、過去にさかのぼって七〇年が適用されれば、収録作品の約半数が、一気に失われてしまう。

延長派がまず主張するのは、「欧米に合わせる必要性」だ。
さまざまな社会制度をならして統合を進めるEUの加盟国には、ごくわずかだが、五〇年を越える保護期間を認めてきた国があった。ルールの統一を目指すあたり、これまで認められた権利の切り下げは避ける前提で協議が進められた結果、長い方が選ばれた。

これを追うように、人気キャラクターの権利の寿命を延ばそうと狙う娯楽産業の働きかけで、アメリカも、保護期間の延長を決めた。さらに、自国の映画、音楽産業の後押しを狙って、日本を含む世界の各国に、延長を要求し始めた。

EUとアメリカの選択はいずれも、インターネットが私たちの社会でどれだけ大きな役割になうようになるか、今ほど明らかでなかった、一九九〇年代半ばのものだ。保護期間を長くすれば、自由に利用できる作品は、より古いものに限られる。官民、さまざまなグループが大

第二期延長反対署名の締め切りは
二〇〇八年二月末

著作権保護期間の延長も行わないよう求める国民署名
著作権保護期間を延ばさないでください。
文化共有の青空がしぼんでしまいます。

署名欄

| | | |
|----|---|-----|
| 氏名 | 〒 | 市町村 |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |

青空文庫
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

著作権保護期間延長に反対します
ムービーより

山川 登美子
〔恋衣〕

山川 丙三郎
ダンテ「神曲」訳、等三篇

山路 愛山
〔明治文学史〕等八篇

山下 利三郎
〔流転〕

山田 美妙
〔武蔵野〕

山中 真雄
〔陣中日誌(遺稿)〕等五篇

山村 暮鳥
〔ちるちるふちる〕等三篇

山本 勝治
〔レミゼラブルのコゼット
(イラスト=Emile Bayard)〕

山本 宣治
〔婦人雑誌と猫〕

ゾー ヴィクトル
〔レミゼラブル〕等六篇

夢野 久作
〔悪魔折神書〕あやかしの鼓
〔瓶詰地獄〕等五〇篇

横瀬 夜雨
〔花守〕等七篇

横光 利一
〔機械〕ナポレオンと田虫「旅愁」等三九篇

与謝野 晶子

与謝野 寛
〔蓬生〕等九篇

与謝野 礼蔵
〔礼蔵法師歌集〕

吉江 喬松
〔伊良湖の旅〕等四篇

吉田 絃二郎
〔沈黙の扉〕等二篇

吉田 秀夫
マルサス「人口論」訳、等三篇

吉野 作造
〔蘇峰先生の「大正の青年と帝国の前途」を読む〕

吉行 エイスケ
〔女百貨店〕等二篇

蘭 郁二郎
〔脳波操縦士〕等三三篇

ランド ハンス
〔冬王〕

リカードウ デイヴィッド
〔経済学及び課税の諸原理〕

リットン エドワード ショージ
アールブルワー

リルケ ライネル・マリア
〔服落〕等三篇

【山川登美子】▶▶▶

規模な電子図書館計画を進めつつある今となって、欧米は保護の壁に阻まれ、作品の公開に苦
勞している。書籍だけではない。今後は音楽や映画などでも、こうした事態が繰り返される。

長い保護期間は、広がり始めた文化共有の青空にかかる、黒雲に他ならない。そのことが明
らかとなって欧米にならうことは、失敗の後追いでしかない」と青空文庫は考える。

もう一つの延長の根拠としてあげられる、「保護期間を延ばせば、創作の意欲が高まる」との
理屈は、さらに疑わしい。

二〇〇九年いっぱいまで権利が切れる、永井荷風。二〇一〇年までの火野葦平、和辻哲郎。二
〇一一年までの小川未明。二〇一二年までの柳田国男、吉川英治、正宗白鳥。いずれも他界して、
四〇年以上過ぎている。少なくとも現時点で生きていない作家には、「保護期間の延長で意欲が
高まる」の理屈は通らない。現在の制度でも、権利は作者が死んだ後、さらに五〇年間も守られる。
今、書いている人にしても、死後五〇年が七〇年になって、意欲がますますは考えにくい。

死後五〇年までの保護で、創作は十分支援できる。以降は共用の仕組みをとのえて、誰も
が利用しやすくした方が、社会全体としてみれば、よほど益がある。保護期間の延長は、過去
の文化遺産を享受する万人の権利を犠牲にして、キャラクターで稼ぐ娯楽産業や、権利の管理
業者だけを潤す可能性が高い。

青空文庫はそう考えて、延長に反対する署名活動を進めている。

添付したDVD・ROMには、反対の理由を説明したビデオと、署名用紙をおさめてある。青
空文庫のトップページで、「著作権の保護期間延長に反対します」のロゴをクリックすると、活
動の詳細を説明したページが開かれる。

読んでほしい。見てほしい。署名してほしい。

青空にかかる黒雲を払いたいと、心から願う。あなたと私の手で。

ルヴェル モーリス

「或る精神異常者」

ルブラン モーリス

「奇巖城」等二篇

ルモンティー カミーユ

「聖」 「ラウスの夜」

レニエ アンリッド

「復讐」等二篇

魯迅

「阿Q正伝」等二篇



魯迅

若杉 鳥子

「烈日」等三篇

若松 賤子

「忘れ形見」

若山 牧水

「樹木とその葉」等六二篇

渡辺 温

「アンドロギナスの商」等一八篇

ワルラス マリー エヌ プリシオン

「純粹経済学要論」

推 薦 の 言 葉

青空文庫が活動を開始して、10年が経過したとお聞きいたしました。

図書館関係者ならば、知らない者はいないであろう、あの青空文庫が開設十周年を迎えられたことに、まずもってお祝いを申し上げたいと存じます。

図書館の最も重要な役割は、人類のもつ知識、情報を万人の共有物として共有化することにあると思われれます。そのために図書館は永い時間をかけて様々な技術、システムを創りつづけてきましたが、青空文庫は近年の情報技術の飛躍的な進歩を利用して著作権の保護期間が切れた著作物を世界中の人々に開放することにより共有化を進めるという偉大な事業を展開されています。しかもその事業を非営利で立上げ、その後数100人のボランティアが支える仕組みも作り上げました。

著作権者の一部には、著作物のエンドユーザーである一般大衆が著作物に敬意を払わず、ないがしろにしていると非難する方々が存在します。しかしそれは大いなる誤解で、多くの市民は文化的歴史的著作物に価値を見出し、心からその作品の永遠なることを願っているものです。青空文庫はそのような心根を強く持ったボランティアの活動の拠点にもなっています。つまり一部の著作権者が望みながら叶えられないと嘆く、作品と作家への敬慕が最も強く発現している営みを実現されているのです。

青空文庫は十周年記念事業として、これまで蓄積してきたコンテンツを取録したDVDを全国の公共図書館、大学附属図書館、高等学校図書館などへ寄贈されるとのことです。DVDは、青空文庫のこれまでの歴史、活動の状況、サイトの利用法などをまとめた小冊子に添付された形で送付されます。DVDに収録される作品は著作権フリーであるため、コピーも自由に行なえるので図書館においてコピーを行ない利用者に頒布することも可能です。青空文庫のサイトへ直接アクセスすることに躊躇する市民も冊子の解説とDVDのデータを用いて作品を鑑賞、分析、加工することが可能です。

青空文庫のこの度の素晴らしい取組みに対して、各図書館においてはPRはもちろんのこと、智恵をしぼって青空文庫の利用促進を図っていただきたいと考えます。たとえば退職後の団塊の世代の中には、お気に入りの文学作品を分析研究する方も少なくないと思います。それらの方々に対して、「青空文庫の利用講座」を開催するなどということも可能でしょう。また大学では既に行なわれている文学作品の分析のための利用なども高校の授業やクラブ活動でも利用できるでしょう。日本図書館協会としても今回の事業に関してささやかなお手伝いをさせていただいていることから、各図書館において積極的な活用が図られることを希望いたします。

社団法人日本図書館協会
常務理事・事務局長 松岡 要

『青空文庫全』の本文とDVD・ROMは、

自由にコピーしてください。